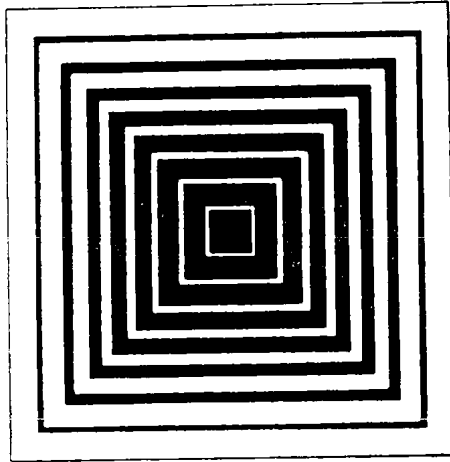


太平記

山崎正和訳



日本の古典-15

河出書房新社

日本の古典
15
太平記

昭和四十六年八月二十日 初版印刷
昭和四十六年八月三十日 初版発行

訳者 山崎正和

装幀者 亀倉雄策

発行者 中島隆之

発行所 株式会社河出書房新社

東京都千代田区神田小川町三丁目六番地

電話 東京(292)三七一一(大代表) 振替 東京一〇八〇二

印刷 凸版印刷株式会社

製本 加藤製本株式会社

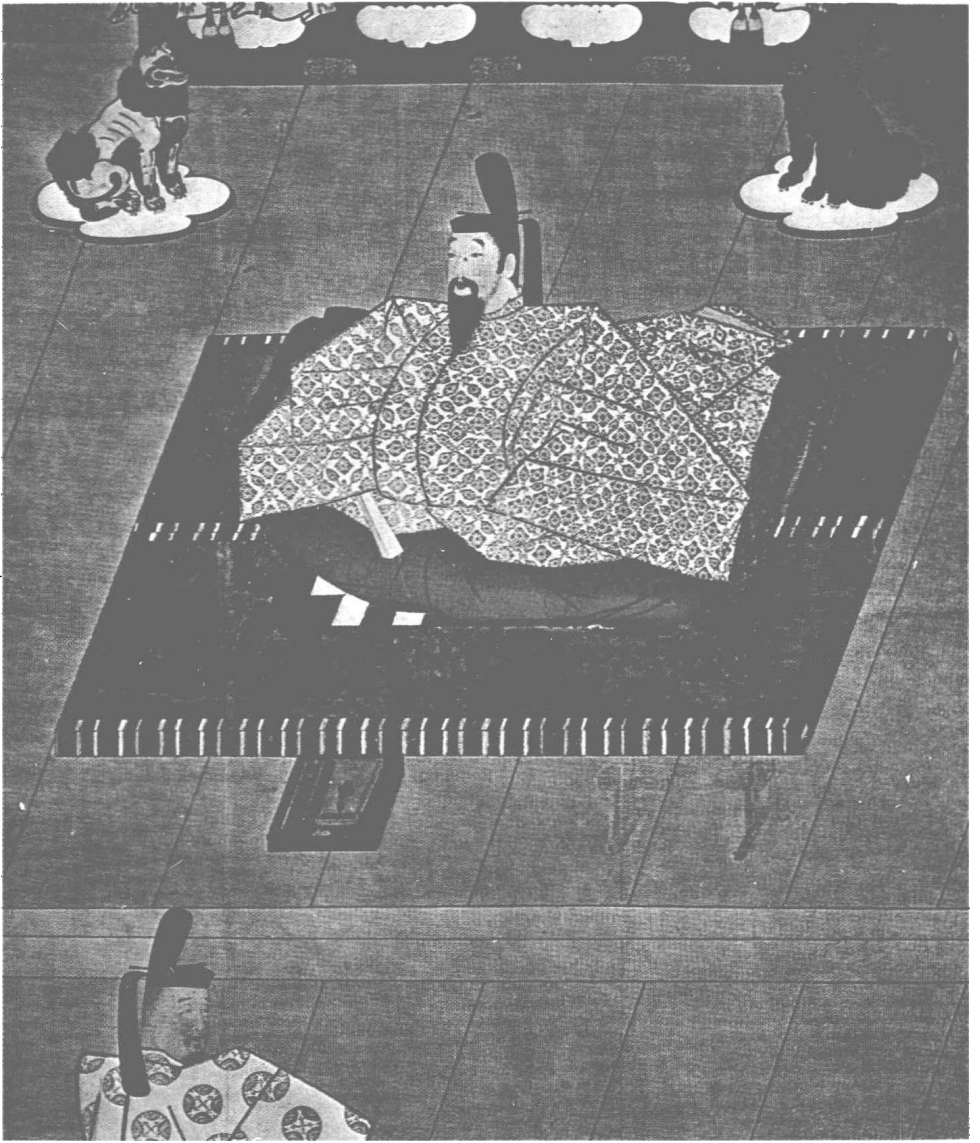
製函 加藤製函印刷株式会社

本文用紙 本州製紙株式会社

クロス 日本クロス工業株式会社

定価 一二〇〇円

©1971



後醍醐天皇画像 京都大徳寺蔵

目次 太平記

太平記…………… 山崎 正和訳 一七

〈作品鑑賞のための古典〉

今川了俊

難太平記…………… 長谷川 端訳 三四

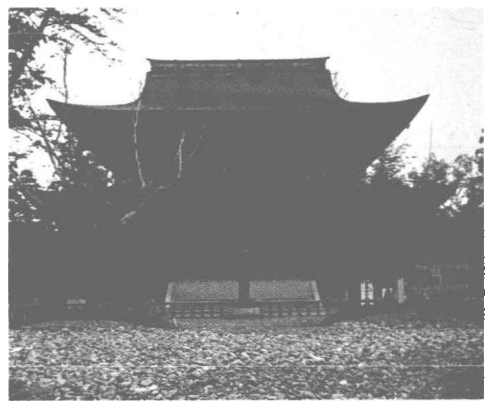
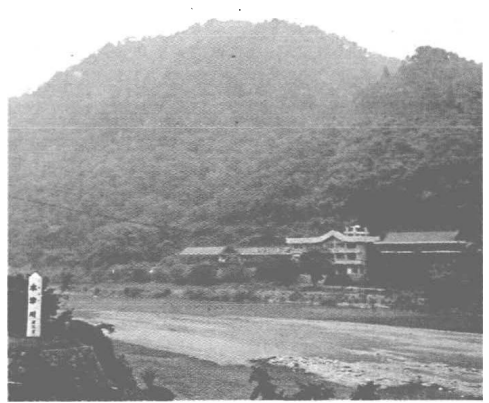
解説 司馬遼太郎 三

解題 青木 晃 三五

「太平記」への手引き 青木 晃 三六

挿絵・カット 羽石光志

解説写真 榑原和夫



ということばでもわかるように、本来、民衆に朗読してきかせたものであり、朗読者は、そのときの都合やら自分の読み癖、好みなどで、多少ははしょったり、辞句を変えたりしていたであろう。私も、「太平記読み」のようにして読んでいたらしく、ひらきなあっていえば本来、そういう種類の書物なのである。

俊基朝臣が謀叛のうたがいでとられて関東へ下向するくだりなどは、まことに名調子でいい。私どものような世代より以上のひとなら、そのリズム感をおぼえておられるにちがひなく、幕末のころにはこの太平記のリズム感が革命家たちの心をゆきぶった。そのことはあとでふれる。いずれにせよ、

「落花ノ雪ニ踏ミ迷フ、交野ノ春ノ桜狩リ」

というこのくだり、単に道行きのリズムで地名にいちい

ちひっかかるのは野暮なのだが、いったい交野にそれほど桜の大きな林があったのかとおもって子供のころに出かけてみたことがある。交野に級友の家があつて、その家の年寄にきくと、「さあ、どうかなあ」という答えがもどってきてがっかりしたことがある。みたところ、ただの丘陵と田園だけの土地で変哲もなかった。交野には平安朝のはじめごろに離宮があつたが、すぐ廃止された。このあたりの野が鳥立ノ原といわれたように天皇の狩猟地であり、「伊勢物語」にもあるように伝説上の桜の名所である。この土地の名所としてのアクセントが狩り場であることなのか桜がうつくしいということなのかはべつとして、ともかくも京の貴族たちから伝統的に愛されてきた土地であつたようにおもえる。

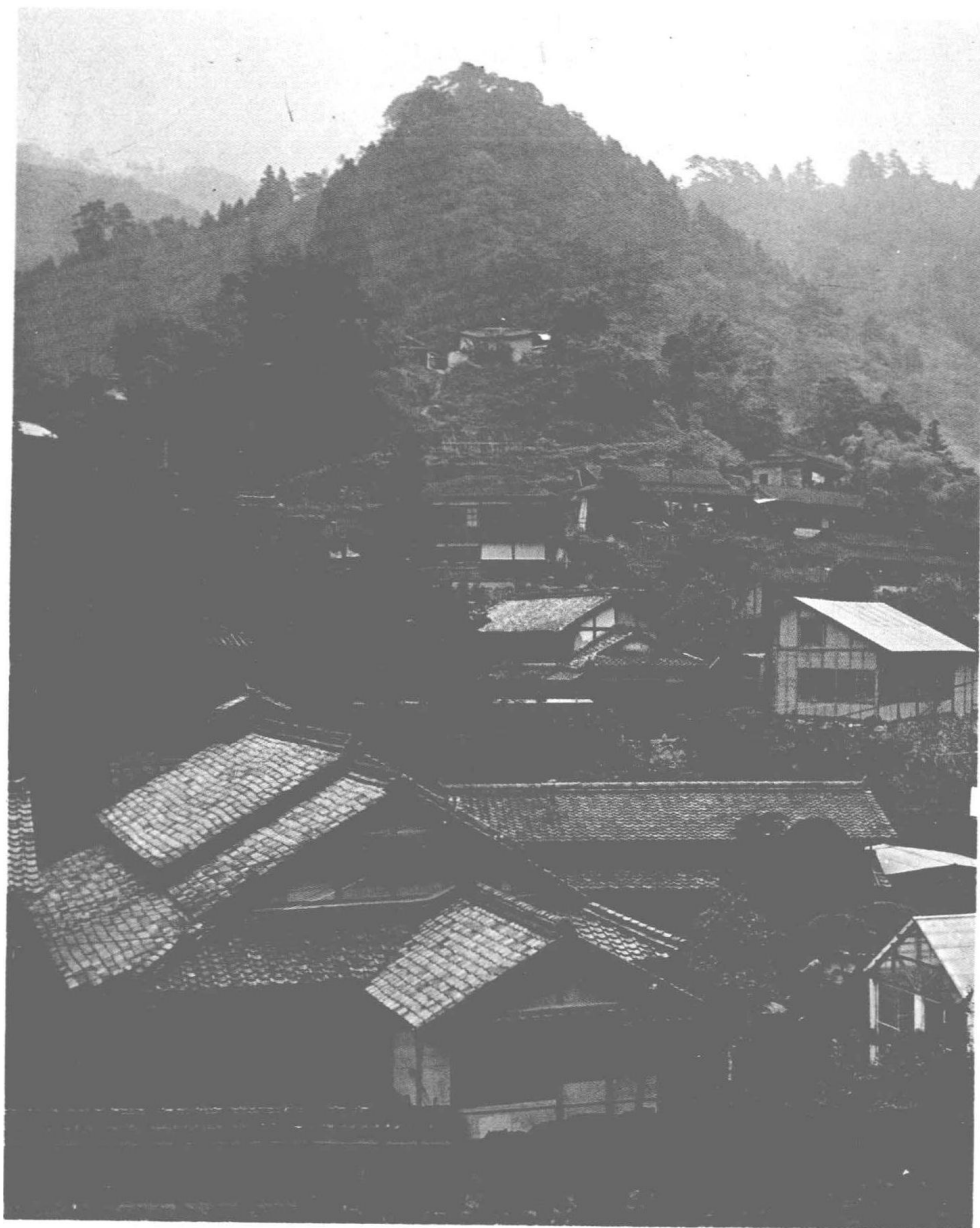
「……物ヲ思ヘバ夜ノ間モ、老蘇ノ森ノ下草ニ駒ヲトドメ

北条氏の追及をのりて、後醍醐帝が立籠つた笠置山の遠景。手前は木津川の流れ。約一カ月で笠置山は陥ち、後醍醐帝は捕えられ、隠岐島に流された。

大塔宮護良親王が旗を挙げた吉野山。吉野山はこの時から南朝の終焉まで南朝方の拠点となつた。真中に見えるのが大塔宮の御座所となつた蔵王堂。

蔵王堂とその広庭。吉野落城の直前、大塔宮が最後の酒宴を開いたのはこの広庭である。

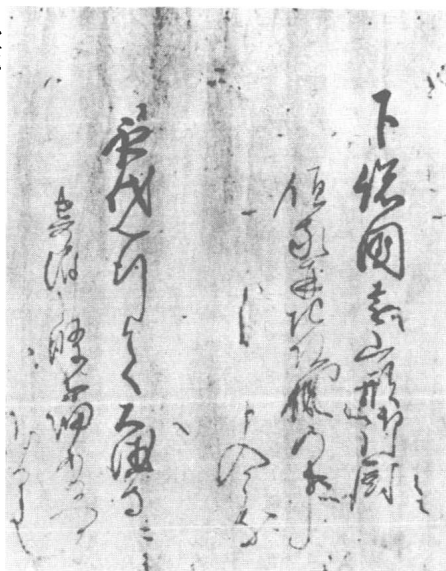
「敵が退くと、大塔宮はお集の広庭に人々をお集めになり、大幕を引きめぐらせて最後の御酒宴を行なわれた」(本文一〇六ページ)



楠正成が拠った河内の千早城（千破鍾城）跡の遠景。

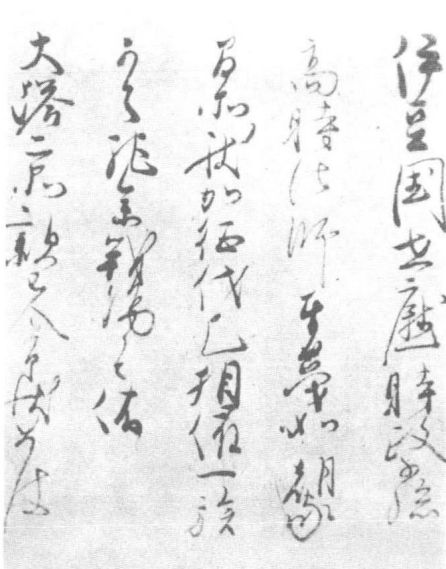
「この城は、東西は谷が深くきれこんで人間が登れそうにもなく、また南北は金剛山につづいて、しかもその峯は鋭く聳え立っていた。しかし、高さは二町ほどで、周囲一里にも足りぬ小城であったから何ほどのことがあろうかと、寄手の勢はこれをみくびり……攻めのぼった」

（本文一〇八ページ）



テ顧ル、フルサトヲ雲ヤ隔ツラン」

というその滋賀県の老蘇の森になが年行ってみたくて、去年わざわざ出かけてみた。遠望すればナマコ形にみえるこの森もあたらしい道路にぶちきられてしまい、鎮守の森程度になってしまっていた。しかしながら太平記のころではこの湖畔平野における雄大な森林であったかどうかということになる、これまた多少あやしい。要するに交野も老蘇も古歌に詠みこまれた名所で、こんにちの流行歌が、長崎の坂とか横浜の夜霧とかをくりかえし歌いつづけているとおなじことであり、それだけのことなのである。それだけのことながら、それらを折りこみ、ちりばめ、畳みこんでゆくところに太平記の名調子がうまれ、日本の歌唱的名所のたねが尽きると、中国の故事をふんだんに踏まえて調子をつけてゆく。われわれはこの意味をさぐるよりも、その調子に酔わなければ太平記の世界のよき受容者に



はなれないのである。

話をすすめよう。
 「今日より正成出づ」という町風俗について。
 これについては、十年ばかり前、八十余歳で亡くなられた菅楯彦画伯からきいた。まだ江戸期のおいものをのこしていた明治十年代から二十年代の大阪の下町でのことである。
 「そういう貼り紙が、町々に出ます」といわれたから、私ははじめおどろいた。町々に楠正成が出るのですか、ときくと、「へい」と、品よくうなずかれる。
 菅楯彦というひとは、落款は「浪速御民」というのを用いられている。いかにも婉々たるめかしく、古武士のよう

写真上、後醍醐天皇繪旨。元弘三年、民部卿局が領家および地頭職を大徳寺に寄進した際の後醍醐帝の繪旨で千種忠類が奉じたもの。写真下、大塔宮護良親王令旨。元弘三年、大塔宮が北条氏打倒のため、熊谷直経に下した令旨で、四条隆貞の奉じたもの。

な律義さを保ちながら生涯大阪の町絵師としてすごされた。若いころから師匠というものはなく、教養は漢学だけであり、画技は大和絵と四条円山派を独学で学ばれ、それを折衷した画風で生涯浪華の町風俗を描いて来られた。

「町内に長屋マタがごわりますな、そういう町内にならず一つは寄席がごわりますな、左様でごわります、べつに商売マタした寄席ではごわりまへんで、まあ道楽なひとが自分の家のふた間ほどを講釈師に貸します」

そういうのが、大阪の寄席であつたらしい。一年なら一年、ずっと太平記を読みつづけるのだという。いまでいえばテレビの連続ドラマのようなものである。

「なにぶん一年は長うごわりますから、途中だ慣れてきて、客のあつまりが悪うなつて参ります。ところが読みますんで、いよいよ正成が出るというくだりにさしかかりますと、門口かどぐちに、今日より正成出づ」という貼り紙を出します。すると、どつと……」

と、いわれる。読み本が太平記なら正成、通俗三国志なら諸葛孔明である。「今日より孔明出づ」といったぐあいの貼り紙が出る。

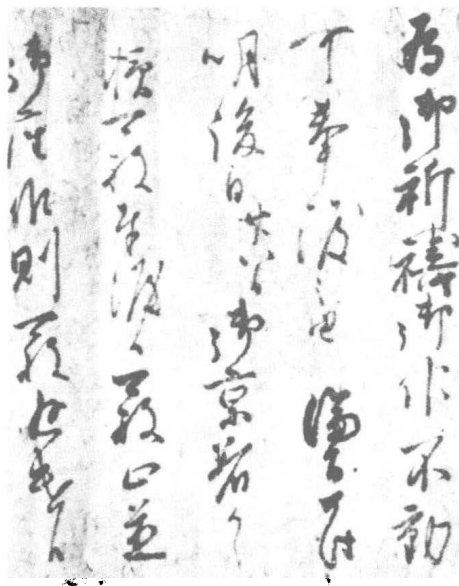
「なんと申しまして、正成と孔明が大へんな人気でごわりましたな」

と、いわれた。講釈だねでいえば「難波戦記」の真田幸村も、孔明、正成とおなじ系列の人物としてうけとられていたにちがいない。

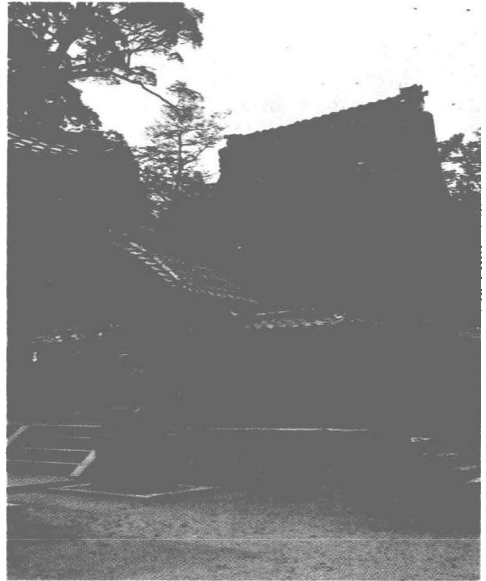
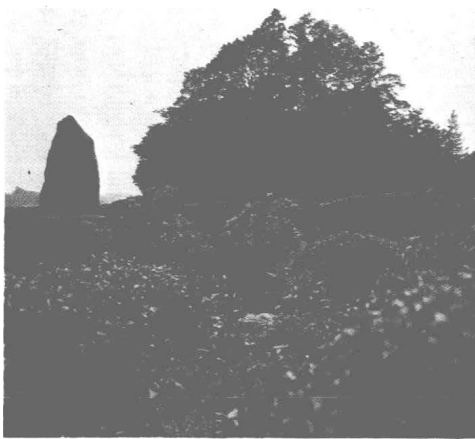
正成、幸村といった類型の原型は諸葛孔明であつたにちがいない。神秘的なほどに巧緻な戦術家で、心術に一点の曇りもなく、さらには教養があり、しかも弱勢の側に立ち、その最期はそろつて劇的であるという点で、三人は共通した感じで造形化されている。もっとも実際の人物も奇妙な

ことにそういう人物であつたらしい。

私の印象的な感じでは、近世の西日本においては東北地方でもてはやされるほどには「義経記」はよろこばれなかつたようにおもえる。宋学以前に成立した「義経記」には大義名分という士大夫的気分を興奮せしめるイデオロギー的要求がまるでなく、しかもその最後は要するに陰惨な兄弟げんかで、さらには義経その人の最後は、右の三人と同様のものでありながら要するに「不如帰」の浪子と武夫と同質のものである。東北地方の老婆の涙をしぼることができても、近世的な産業社会の萌芽が出はじめていた西日本のあるい体質に快感をあたえたり、不満を癒やしたりすることにはむかなかつたのであろう。それよりも太平記における正成の機略性のほうが、聴く者に商人的日常体験があるために、快感や共感をよんだにちがいない。さらには、すでに江戸末期になると武家社会から庶民レベ



桶家の菩提寺、河内の観心寺に残る正成の書状。



ルにまで浸透していた朱子学的思考——たとえば大義名分——といういわば当時の道理にもかなくなって、義経の末路が恐山の陰惨さを帯びて救いが無いのに対し、正成の末路には近世人はそれを一個の哲学的な死として解釈し、いわば後世への風通しとしてところよきを感じしめる。ついでながら「義経記」は、幕末でも仙台の町々などでさらに講釈されていたという。菅楯彦氏のいう大阪の町々での太平記講釈とはいかにも対蹠的であり、「義経記」を愛した東北人が幕末のイデオロギー流行期に参加できず、「太平記」好きの西国武士にしてやられてしまったというのも偶然でないかもしれない。ただしこの見方はあくまでも没価値論的にいつているわけで、太平記が政治論の書としてどうこうというわけではない。

ともあれ、この稗史の影響は、深刻である。たとえば、幕末、京の祇園で、

「長州様は、正成をなさるそうな」

と、いわれていたという。正成についての一個の通念が京の庶民のあいだにまで共有されていたということであり、宣伝上手の幕末長州人はそういう庶民感情をうまくとらえて、自分たちの政治的立場がいかに正義であるかを、そのように簡潔な、つまりキャッチ・フレーズをもって端的に訴えていたともいえるかもしれない。

さもなければ、文久三年夏の政変で政治的足場をうしなしい、翌元治元年の蛤御門ノ変によって幕府の敵であると同時に朝敵になってしまった長州人に対し、京や京の近郊のひとつひとつが、かれら政治犯をかくまったり、落武者をにがしてやったりするなど、命がけでかばったという理由が出て米ないのである。日柳燕石の詩をみてもわかるように、幕末の志士たちの心情も思想も行動もことごとくみずから

宮方に移った足利尊氏が北条氏討伐の願文を納めた京都市郊外・篠村八幡宮の社頭。当八幡には尊氏自筆と伝えられる願文の他に諸将が矢を献上した矢塚も残されている。

「足利殿はみずから筆を執って花押をお記しになり、上差の鐮矢一本を添えて神殿に奉納されたから、弟殿に義殿をはじめ、吉良……以下従う人々がわれもわれもと上差を一本ずつ献上したので、矢は社壇を埋みつくして、塚のように積みあげられた」
(本文一四二ページ)

新田義貞が北条勢を敵つた小手指原の合戦の跡。現在の東京郊外・狭山ヶ丘。合戦跡の碑が残っている。後ろの小高い丘は義貞が本陣を構えた森。

正成になるということから発起されたものであったし、それをうけ容れる庶民の側にもそういう素地があったということがいえる。

私はイデオロギーというものを、たとえば体質的に酒を好まないという程度の意味においてそれを好まないが、ところが太平記には酒臭がにおっている。大胆に言えばイデオロギーの書であるといえるかもしれない。すくなくとも「平家物語」や「源平盛衰記」にくらべてきわだって太平記を特徴づけるものは、宋学の影響である。

太平記において宋学の影響があるかないかということについては、かつて多少論議された。証拠がないともいわれたが、これはやや愚論というべく、証拠といえば太平記そのものが証拠なのである。

さらに太平記に登場する最も重要な人物は後醍醐天皇だ



が、この後醍醐が宋学の書を読んだかどうかということについても専門家の世界に議論が多い。証拠がないといわれる。しかしながら、これは慎重でありすぎる考え方であろう。後醍醐天皇の行動、生涯そのものが宋学イデオロギー（大義名分論・正閏論）でつらぬかれており、これまたそれそのものが根拠なのである。

いったいその当時、宋学の書物がそれほど多く伝来されていたか、という疑問も在来あるが、しかしながらこれも慎重でありすぎる態度であり、証拠といえば時代そのものが巨大な状況証拠なのである。当時南宋はすでにほろび、異民族の元帝国が中国を支配していたが、南宋のころから南シナにあっては沿岸の港市を中心に巨大な貿易時代が進行していた。おそらく中国人たちはアラビア人の影響をうけたのであろう、遠洋航海術もかれらのものになり、大船の建造技術もすすんでいた。この東アジアにおける大い

元弘三年、高時以下の北条氏一門数百人が火を放ち一斉に自害した鎌倉・葛西ヶ谷の東勝寺跡。昼なお暗い葛西ヶ谷の奥には、今も訪れる人は少ない。

鎌倉・二階堂の奥にある大塔宮護良親王の墓所。この近くに大塔宮が幽閉されていた土牢が残り祀られている。

る経済時代であって日本だけが孤立していた、と考えるほうが、むしろ特異である。南シナ貿易の運動圏は、日本の九州とその属島をふくんでいた。当時の日本の中央や地方政権と無関係で活動していた小船舶による航海貿易者——たとえば倭寇——は、貿易というには卑弱なものであったかもしれないが、それでもかれらの存在を無視してこの時代は語れない。かれらの求めるところは主として書物、書画、經典にあったという。それらは官營貿易ではなかったにせよ、將來してくるものにはかわりはない。宋学の書が、京都あたりや、地方の富裕な寺院などに相当入っていたであろうことは、状況としては否定できない。

要するに太平記を理解するには、その背景になっている東アジアの歴史的な、もしくは精神的な動きを知らねばならず、言葉を変えていえば、そういう東アジア的規模の



背景が、太平記という書物と、そのなかで活躍する人物たちを生んだといえる。

ここで宋学についてわずかにふれたい。中国の学問の歴史は、漢代と唐代にあっては訓詁（クニゴト）で明けくれている。儒教はかならずしも哲学ではないが、哲学的な思弁を必要とする道教や仏教がながい年月のあいだに儒学に影響をあたえ、宋代にいたってそれが顕出した。

宋代の学問世界は、訓詁をすてきったわけでないにせよ、中国の思想上、最初に出現する觀念論的哲学の流行期である。朱子学の成立にいたってそれが大きく完成し、やがて宋が北方の異民族国家である金に圧迫されるにおよんでこれがイデオロギーになってゆくのだが、いづれにせよ、宋学でもっともやかましい議論の分野は、春秋学であった。歴史を倫理的立場で批判し、強烈な倫理的理念で秩序づけようというものに、「天ニ一日ナク、地ニ三王ナシ」といわれるように、一王によって統一された、もしくはされるべき天下秩序の確立というのをやかましくいう。そういう思弁の世界のなかで不動の理念として説かれるのは、大義名分論である。

宋はもと開封に都があったが、国家ができあがって一世紀半ほど経ってから北方の金——ツングース民族——に圧迫され、揚子江の南へうつらざるをえなかった。開封時代を北宋といい、南渡してからを南宋という。学者や思想家が中国史上もっとも多く出たが、武力はよわく、異民族に圧迫されつづけてあった。この南宋の状態をよくあらわしていることばに、

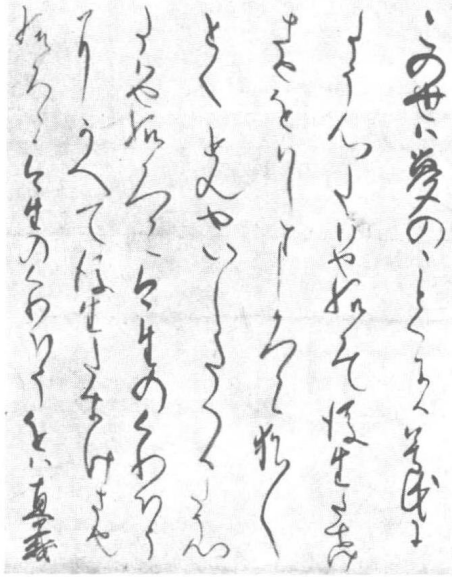
「声容盛んにして武備衰え、議論多くして成功すくなし」というのがある。学者たちが、正統を論じ、名分を論じ、国家をささえるフィクションとしての義を論じ、さら

群馬県足利市にある、足利家の菩提寺・鏝阿寺の本堂。鏝阿寺は今も「大日様」といわれて足利市民に親しまれている。この本堂の屋根瓦に彫られているのが足利家の紋所「丸に二の字（二引両）」である。なお、紋所については巻末の『金平記への手引き』に詳しい。図が載せられている。

には夷を攘ち王を尊ぶという尊王攘夷論をやかましく論じたが、結局は北方の騎馬民族の弓勢の前にはそれらはすべてむなしく、一二七九年、モンゴル人の帝国である元のためにほろんだ。日本でいえば鎌倉における北条執権時代である。

南宋はほろんで、そのおびただしい議論と学説だけがのこされた。それらが、東シナ海の季節風に乗って日本に伝来した。日本がこのために、南北朝時代という、日本史上最初のイデオロギー時代を迎える。

日本の天皇というのは、奈良朝のそれはしばらく措くとして、平安朝以後は権力ではなく、多分に宗教性を帯び、神聖ではあっても実体としては霧のむこうの影のような存在であり、いわば権威であった。権威という点では、文官、武官、僧官など百官を権威づけるための唯一無二の源



泉であったにせよ、しかしながらたとえば宋の皇帝のごとく天皇みずからが絶対権力をもって政治をおこなうという体制ではなく、中国の皇帝とは同日に論ぜられないほどに性質を異にしている。

中国にあつてはもともと皇帝個人に専制権があつた。その専制を整備し、不動のものとして制度化したが、宋帝国からである。この帝国を興した太祖趙匡胤は中国における政権の衰弱はつねに軍閥のばつこにあるとし、兵馬の職には文官を任命し、武人によって私領化されていた藩鎮をすべておさめて朝廷の直轄領にし、地方の兵を中央にあつめて禁軍(官軍)を増強し、徹底的な文治主義をとつた。いわば趙匡胤は皇帝革命ともいふべき中国政治史上の大改革者であつたが、かれのやったことを日本の規模において実行しようとしたのが後醍醐天皇であり、それを一時的に成功せしめたのが建武ノ中興であり、日本の革命思想の原理がつねに日本で育つことなく海のむこうからくるという不幸な原型をつくつた最初の人でもある。

後醍醐天皇は日本史における一個の政治的奇形者であり、その奇であることは、かれが天皇であることよりも皇帝になることを熱願したところにあつた。かれは趙匡胤になつたというこの壮大な幻覚に憑かれて軍閥——北条執権政府——と現実の壁とたたかい、日本中に争乱をおこし、ついに建武中興帝国という日本史上におけるふしぎな政権を確立したひとである。もつともその革命政権は日本的現実からみれば一片のフィクションにすぎなかつたためにほとんどなく現実の体現者である足利尊氏のためにたおされ、この趙匡胤にあこがれた人物は流寓のなかで死なざるをえなかつた。

中国的政治風土のなかから出たほんものの趙匡胤は、

足利尊氏が建武三年に清水寺に納めた自筆の願文。楠正成が戦死し、尊氏が北朝を擁立したことで、文中にみずから遺世の志があることなどが示されている。常盤山文庫蔵。

「宰相は読書の人を用うべし」

とし、試験制度によって野の秀才を官に吸いあげてついに宰相にまでしてゆくという制度を確立したが、後醍醐帝の理想であった「建武中興帝国」はそこまではできず、世襲の公家貴族をもって「読書の人」であるとし、これに宰相以下の地位をあたえた。この一事をもってしても、後醍醐帝には権力欲以外に後世の範になるような革命の理想などはなかったことがわかる。

後醍醐天皇というのは、たしかに英雄の素質はあった。幼少のころから慧く、さらには性格としては粘着力に富み、異常なほどに執念ぶかく、しかも性欲も尋常ではない。たとえば真言立川流という性的宗教に淫して性生活までを宗教化し、性を通じて即身成仏の道を志したということひとつを考えてみても、日本人としては驚歎すべきひとである



といえる。こういうひとでなければ、いかに宋学による行動の正当化があったにしても、天皇であることから皇帝へ跳躍しようという願望と執心はもてなかったであろう。

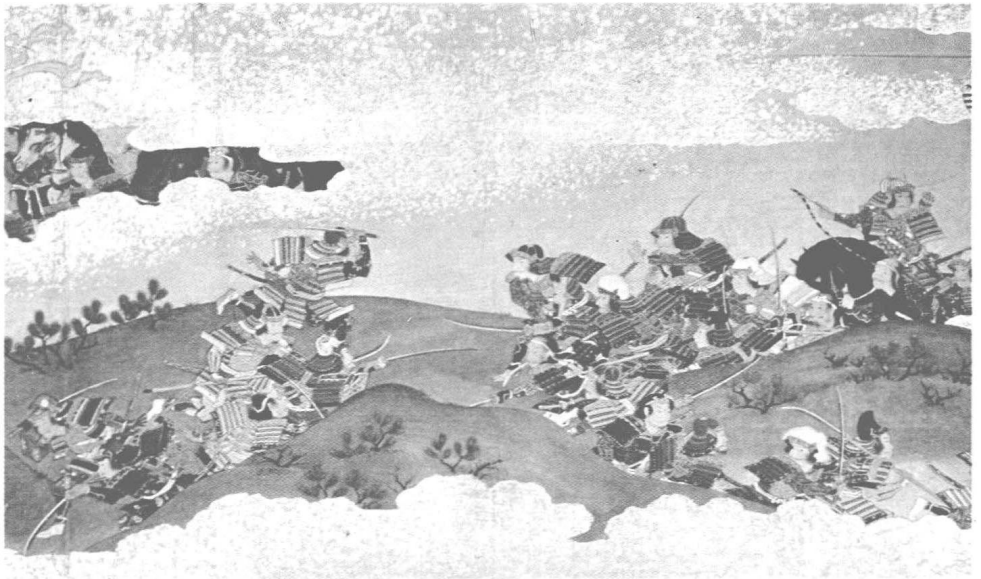
太平記における事の発端は、理念的なものから出たわけではなく、皇位についての相続あらそいから出たものであった。

当時、皇位の継承権に両統があり、両統かわるがわるに皇位につくというしきたりになっていた。ところが後醍醐帝が皇位につくや、他の系統の親王を皇太子にはせず、自分の系統の者をそのようにしようとし、それによって紛糾がおこった。他の系統の宮廷人は鎌倉幕府（北条執権政府）にはたつきかけてその後援を得、むりやりに皇太子を立てたところ、後醍醐天皇はふんがいし、ついに討幕計画をた

吉野山中の吉水院に残る後醍醐帝の玉座。吉水院は一時期、南朝の皇居となったところである。

吉野に近い山中の村・賀名生の堀家。後醍醐帝が足利氏の追及をのがれて京都を落ち、身を隠したところで、現在も黒木御所と呼ばれている。

後醍醐帝の没後、足利方の内紛に乗じて、勢いを盛り返した南朝方が、後村上帝の行在所とした河内の金剛寺。



て、王権による天下統一を考えた。動機がそのような卑小なことから出発していることが、建武ノ中興という事業の歴史的規模を——結果としては全日本をゆるがしたものでありながら——小さなものにしてしまっている。

この後醍醐帝の天皇反乱が全国的大争乱をひきおこすまでにいたったのは、宋学によるイデオロギーによるものではむろんなかった。ごく現実的な、当時の政情不安と相続法のあいまいさによるものであった。

朝廷でも皇位の継承法があいまいだったように、一般もそうであつたらしい。一つの莊園や田地を、叔父とおいがあらずたり、兄弟がたがいに相続でもめあつたりして、要するに後世のように正嫡の長男が完全相続するというルールが確立してはいなかった。このあらずにはときに武力がもちいられ、村落単位の戦争——とつかない喧嘩刃傷沙汰——が頻発していた。むろん訴訟にもちこんだ。

この種の訴訟は鎌倉にもちこまれ、そこで公平な裁判をうけるというのが源頼朝以来の法であり、ことに北条執権政府になつてからは、北条義時、泰時、時頼といったぐあいに日本史上第一等の政治家が相次いで出たために、地方の御家人たちにとって鎌倉の北条執権政府の信用というものは大きく、たれもこの政体をこわしたいと思うものはなかった。武士にとって土地がすべてであった。その土地に関する紛争の裁き手として鎌倉という中央が必要であり、それがために「鎌倉ノ命、山ノゴトシ」として武士たちは鎌倉を守ろうとした。鎌倉は専制政権では決してなく、在郷武士たちの現実的な解釈としては、この政権は民事訴訟の司法院というのが本質であつた。

ところが、後醍醐天皇のころの執権は北条高時であつた。太平記によるとかれの評価はじつにひくいが、実際に

京都の三時知恩寺に伝わる「太平記絵巻」中の合戦場面。当時の合戦の様相については、巻末の「太平記」への手引きに詳しい。

はどういう人物であったかはわからないにせよ、かれが民事司法府の統裁者であるという聖職をなおざりにしていたことはたしかであり、じつさいに裁判を専断しているのは長崎高資という人物で、この人物がつねに偏見とおのれの利害をもって判決をくだすため諸国で怨声満ち、ついには津軽などでは内乱がおこるしまつてであった。鎌倉はその機能を喪失した。在郷の武士たちの心が、

——鎌倉に代る司法権を。

と望みはじめたのは、ただそれだけの理由である。が、ことが土地に関することだけに、それだけのことながらそれが武士どもの満足と不満のすべてであり、津々浦々に潜在的な内乱気分が鬱積しはじめた。

そこへ朝廷にまで、その相統上の紛争がおこった。南北朝時代という、江戸期の水戸史家たちがこの時代をもって尊王踐霸という一大イデオロギー時代と観じたその実体は、よけいなものを洗い去ってみれば、それだけの現実なのである。

鎌倉の司法権は、当然朝廷にまでおよぶ。朝廷は後醍醐天皇がその頂点に立っている大覚寺統と、後伏見上皇を頂点とする持明院統とが相争い、それぞれ系統に属する公家、官人、僧侶までがはげしく対立して収拾がつかなくなっていた。その理由はさきにもべたように後醍醐天皇が「兩統迭立」という交互相統のルールを無視して大覚寺統で皇位を独占しようとしたためだが、これには鎌倉の北条氏はあたまをなやまし、やはり前例尊重という穏当な裁定をくだし、元弘元年、高時が、

「寿永の例によりまして」

ということ、持明院統の親王をもって皇位につかしめ

ようとした。後醍醐帝は、鎌倉が実力をもってこの裁定を実現しようとする気配におどろき、いっせ鎌倉をたおそうとしたが、途中事が洩れたために京をすてて笠置に走り、近国の武士をよびあつめはじめた。京にあつては鎌倉は持明院統を支持しつづけ、光厳天皇が即位した。南方の笠置山に蒙塵した後醍醐帝——大覚寺統——を中国風に南朝とよぶ。のちの皇国史観ではこれを唯一の天皇とし、吉野朝時代とよび、南北朝時代という「二人の天子」を容認した見方をゆるさない。江南（揚子江以南）に逃げた南宋の学者や思想家たちが名分論や正閏論をたたかわすように、日本では江戸期に水戸史学が大覚寺統を「正」とし、明治後までこの論議がつづいていた。

「南北朝時代」

というこの六十年ばかりの時代が、太平記があつかっている時間的舞台である。途中、北条氏がたおれ、建武ノ中興が成立し、すぐさま倒れて、武士たちのあたらしい調整権力として足利尊氏が時代に押しあげられて勢力を得、ついに天下をとり、北条氏がたてた北朝の擁立をつづける。むろん、その皇統はこんちにまでつづいている。

ところが、後世になるにつれてこの時代を中国風のイデオロギー時代としてみる気分が高まり、江戸期に入って宋学の最終的結末ともいふべき朱子学が官学として採用されたため、観念論的論争はいよいよさかんになった。

水戸学以前においては、山崎闇斎が「倭鑑」をあらわすことによつて南朝を「正」としたことが最初の権威であつたらう。水戸学の大日本史はそれを採り、在野では頼山陽が「日本外史」において南朝正統論をとつて、南朝護持のために身命をささげた楠正成を思想上の英雄としてとりあげ、これが覇者である徳川氏の武権をたおそうとする幕末